

# 数研 AGORA

▶ 人新世の新たな公共圏に向けて  
／矢野智司……1  
▶ 新科目「公共」における主体的・対話  
的で深い学びとは／山本雅康……4

▶ 博学連携の実践から歴史教育を考え  
る／陶山 浩……8  
▶ オンライン授業のデザイン  
／森田裕介……12

No.75

この用紙は、再生紙を使用しています。

## 人新世の新たな公共圏に向けて —コロナ禍のなかの公民科「公共」の意義—

佛教大学教授 京都大学名誉教授  
矢野 智司

### 1. 人新世におけるコロナ禍と地球温暖化

新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、あらためて世界が同一の平面上で連なる一つのものであり、住んでいる地域の違いにかかわらず、私たちはみな人類の一員としてこの一つの世界にともに生きていることを実感させることになりました。

これまでも「世界」や「人類」という言葉は使用されてきましたが、その意味がすべての人にとって本当に肌身で実感されるようになったのは、「世界史」ではじめてのことではないでしょうか。「世界大戦」はあっても、世界のすべての地域が戦争に巻き込まれたわけではなかったのですが、このコロナ禍は文字通り地球上のすべての地域を呑み込み、地表に住まう人間すべてを覆う「人類共通の厄災」として経験されることになりました。

このように考えるならば、このコロナ禍以前にも地球規模でコロナ禍と同様の「人類共通の厄災」にすでに直面していたことに気づきます。もはや修復が不可能になるかも知れない臨界点に近づきつつある地球規模での環境破壊「地球温暖化」がそれです。

オゾン層の破壊を警告した化学者パウル・クルツェンは、産業革命以降の二酸化炭素の大量排出や人工の化学物質の汚染などによって地球の化学的構成自体が変容するにいたっているとし、地球温暖化をもたらした現在の時代を地質時代区分として「人新世」と呼ぶことを提唱しています。この「人新世」は新型コロナウイルスの出現と無関係ではないので

す。それというのも、地球温暖化をもたらしたのは、人間が無制限なく欲望を拡大させ、自然からバランスの回復力を上回るほどの過剰な収奪をしたからです。それまで人間と自然とを隔てていたさまざまな境界をつぎつぎと人間が乗り超えていくようになりました。その結果、以前であれば接触することのなかった野生動物との接触も起こり、未知のウイルスによる感染の機会も拡大してしまっただけです。さらに温暖化によって溶けはじめたシベリア凍土からも古代の未知のウイルスが発見されるにいたっています。

結局のところ、今回の新型コロナウイルス感染の蔓延も、「人新世」のこうした一連の人間の果てしない生活圏の拡大＝経済のグローバリゼーションによってもたらされたといえるのです。

### 2. 経済のグローバリゼーションがもたらした公共圏の拡大

「人新世」の時代における地球規模の環境破壊を加速させたのは、いうまでもなく経済のグローバリゼーションです。つまり経済のグローバリゼーションによって、この地球に住むすべての人間（厳密に言えば人間だけではなく動植物すべての生命体）が、同じ厄災の下に生きるように運命づけられるようになりました。私たちの運命は、個々のローカルな地域の運命にとどまらず、「人類」共通の運命になるにいたったのです。「世界史」「人類史」という観点から考えれば、私たちはいまや大きな歴史的転

換点に巡りあわせていることを意味します。それというのも、このグローバリゼーションにかかわる問題群、パンデミック・地球温暖化(教科書『公共』p.50、『高等学校 公共』p.46)にとどまらず国際金融危機(教科書『公共』p.212、『高等学校 公共』p.190)・南北の経済格差(教科書『公共』p.216、『高等学校 公共』p.194)・民族問題(教科書『公共』p.198、『高等学校 公共』p.120)・紛争とテロ(教科書『公共』pp.198~199、『高等学校 公共』pp.120~121)・難民の拡大(教科書『公共』pp.200~201、『高等学校 公共』pp.138~139)……は、大国といえども決して一国の努力では解決することができず、他の国々との相互信頼に基づく協調なしにはその解決の道を見いだすことができないものです。

問題解決のためには、国民国家が互いの主権を高次の国際機関に部分的に委譲しなければならなくなりました。つまり国家の主権は制限されることになったのです。人権にかんする国際条約や国際連合をはじめとする国際機関によって、そうした制限をすでに課せられてきましたが、これまでとは比較にならないほど国際協調は緊密かつ強力になされなければならなくなりました。かつてカントが『永遠平和のために』で唱えた「世界共和国」の理念がよみがえってきました。

もしこの問題が解決できないならば人類に明日はなくなることでしょう。それというのも、もしどこかの地域・国家がこうした協調を拒否することによって利益を得て勝者になることがあったとしても、それは一時的なものにすぎず、最終的にはすべての地域・国家が敗者となるからです。

このように考えるなら、「人新世」における「公共」の概念は、「人類」のみならずすべての生命体の次元にまで拡張されなければならないといえます。このとき「人類」とはいま生きている人間の総体以上のものを指すことになります。重要なのは「人類」の持続であり、未だ生まれてはいない世代への責任を負うことでもあるからです。さらにまた「人類」の持続のためには、他の生命体もまた存続しなければなりません。植物の光合成が大気に酸素を供給したように、地球環境は人類を含めた生命体全体のネットワークによって相互に形成され進化してきたからです。そしてさらに考えると、人類と生命体の存続という人間中心主義・生命中心主義の思考のみで公共圏を捉えるのではまだ不十分であって、「公共」の概念は人類・生命体にとどまらず、人類・生命体

と結びつく非生命(土壌・水・大気……)にまで拡張される必要があることに気づかされます。このようにして「人新世」における「公共圏」は、地球環境全体におよぶことになります。

### 3. 人類史的課題と教育の役割

そうであるのなら、教育の在り方もこれまでとは異なるこの新たな世界史的・人類史的課題に応答しなくてはならなくなるといえます。満18歳以上になると選挙権を得ることができます。生徒もまた未来の運命の政治的選択に参加する権利を得ることになります。それは自分たちの将来の生活を作り出す責任とともに、未だこの世に生まれていない未生の多くの人々への責任を課せられることでもあります。未来の公共空間としての地球環境と人類の福祉にどのようにかわるのか、その政治的選択の責任は重大だといえるでしょう。

教育は自立的で主体的な個人の形成、良き市民・国民の形成にとどまることなく、同時に良き「世界市民」の育成といったことが求められることになります。かつてであれば、世界市民=コスモポリタンといえ、生まれ育った郷土や祖国に背を向けて生きる根無し草として、批判的に捉えられることも多かったのですが、地球環境の保全や人類の福祉が抽象的で空虚な理念ではなく、いまここでの具体的な活動や選択と密接に結びついている今日では事情は異なります。いまや私たちのそれぞれの地域や国家での活動や政治的選択において、地球とそこに生きる人類の運命と関係のないことなど一つとしてないのです。なにげなく道ばたに捨てたプラスチックゴミは海へと流れでて集積し、世界中に深刻な海洋汚染を引き起こすでしょうし(教科書『公共』p.46、『高等学校 公共』p.42)、フェアトレードの作物を選択することは、南北の経済格差の解消につながります(教科書『公共』pp.204~205、『高等学校 公共』p.141)。世界市民であることは、いまやもっともリアルな在り方となりました。

このとき世界市民に求められる大切な能力は、いまここでの行為と選択が、身の回りの狭い境界を超えて広く地球環境と人類全体の福祉へと関係すると考えることのできる想像力と、境界を超えてる想像力を駆動する仲間ではない他者(人間ではない生命体、さらにその生命体と結びついた非生命も含めて)への深い共感力、そしてその想像力に基づき問題解決を可能にする確かな知識と社会的技能です。

数研出版の教科書『公共』『高等学校 公共』は、このような今日的な世界史の人類史的課題と対応しつつ、社会建設の主体となるべき生徒が自己形成するためのスタンダードな知識と社会的技能とを提示しています。『公共』は、一方で市民・国民として身につけておかねばならない身近な公共生活についての知識・社会的技能を示すとともに、他方でこの新たな事態として明確に形をとりはじめた公共圏としての地球環境と人類の課題とかわる知識・社会的技能についても提示しています。

例えば、「第2章第2節 現代の諸課題と倫理」では「地球環境をめぐる問題」を取りあげています。また近年注目されるようになった「持続可能な開発目標」(SDGs)については、「THINKING TIME」というオリジナルな欄を特設し、課題探究の具体的な手法と結びつけて、生徒自らが学習を深めることができるようにしています(教科書『公共』pp.220~221)。さらにまた「第6章 国際社会の動向と日本の役割」では、国際法の考え方と国際連合の仕組みをわかりやすく解説しています。



◀教科書『公共』 p.220

#### 4. 人類史的課題と向かい合う「思想の道具箱」としての教科書

しかし、こうした「人新世」の経済のグローバリゼーションの課題とつながることは、生徒自身が実際に生活しているローカルな場所で具体的に直面している権利と義務にかかわる諸問題をないがしろにすることではありません。むしろ具体的な問題解決を通して、権利と義務にかかわる自覚と知識・社会的技能を深めることが不可欠でもあるのです。その

ことがひろがって地球的規模での歴史の人類史的課題にかかわる通路を開きもするのです。

職業をもち仕事をするさいに直面する問題は、表現の自由を浸蝕する基本的人権への侵犯や、ブラック企業のような労働者の権利を損なう違法行為や、また環境破壊のような企業の違法行為にかかわってきます。『公共』の「第3章 公共的な空間における基本原理」そして「第5章 現代の経済社会と経済活動のあり方」では、このような問題と向き合うための人権と法についての基本的な知識を与えてくれます。生徒は市民として職業人として、社会で直面することになる具体的な問題解決の知識と社会的技能を学ばなくてはなりません。そして、こうした身近な公共空間における人権と法の大切さへの目覚めは、はるか国境の彼方で起こる見知らぬ人々にたいする人権侵犯や暴力や差別の問題にたいしても無関心ではいられなくなるのです。

自らコミュニティの一員として参加し、そのような政治的社会的課題にかかわる市民・国民の一員として生き、かつ地球的規模での問題への関心をもつこと。文化多様性のなか自文化中心主義・自国中心主義を乗り越えて、最初からルールを共有してはいない他者との連帯を構築し、世界市民としての責任をも果たすこと。このような生き方や考え方を深めるためには、基本的な知識と社会的技能を必要としています。

ネット世界と接続することによって、だれもが大量の情報に容易にアクセスできるようになりましたが、利害関係が複雑に錯綜するなかで、フェイクな情報に惑わされず、なにごより正確な情報なのかを探り当てるには知識を必要とします。また意見の異なる他者の言葉に耳を傾け、他者とともに事実を精査し、新たなルールを構築し、より優れた未来社会を構想しそれを実現していくためには、批判的な思考力と社会的技能の養成が求められてもいます。

教科書『公共』『高等学校 公共』は、生徒にとって倫理的主体として未来を切り開くための有用な思想ツールの一杯つまった道具箱であるとともに、教師にとってもよりよい人類の未来世界を構築するために役立つ道具箱とあってよいでしょう。「人類共通の厄災」というべきコロナ禍のいま、教科としての公民科「公共」の今日的な意義は、この教科が設置されるときに当初に考えられていた以上に、重大なものといえるのではないのでしょうか。